

がそれを受け入れた。プロテスタントの宣伝文書は民衆語で書かれ、女性たちが聖書を読む権利を熱心に擁護した。多くの女性たちにとって、プロテスタントに加入することは、なによりも、知的生活へのアピールであったと、ナタリ・ゼモン・ダヴィは明示している。<sup>6)</sup> ピカルディ出身のマリ・ダンチェールはその輝かしい例である。『極めて有用な書簡』において、宗教改革に参加したこの元修道女はただ単に、女性の聖書へのアプローチを求めているだけでなく、女性たちが宗教問題を取り扱う権利、あるいは、一彼女は女性が集会で説教することが許されていないことを知っていたので、一少なくとも、互いに忠告し、聖書について書く権利を要求した。<sup>7)</sup>

『書簡』のなかでマリ・ダンチェールは「まず第一に願っていることは、真理を知り、聴くことを望んでいる貧しい女性たちに語りかけることである。」と書いている。ジュネーブでは、実際、彼女はカトリック教会に忠実なクララ修道会を改宗させることを他のユグノーの女性信者ととともに努めた。彼女は「説教した」とクララ会のジャンヌ・ド・ジュシーは憤慨している。<sup>8)</sup>

マリ・ダンチェールが説教に加わった唯一のプロテスタント女性信徒ではなかった。ジャーヌ・ガリソンは次のように述べている。「み言葉への自発的なこの参与は、ただちに、障害にぶつかった。」1560年、大会と地方教会会議の決定事項、すなわち、女性は「公の場で、読むことも、祈ることもしてはならない。」「洗礼を受けることも許されていない。」<sup>9)</sup> である。カルヴァンやヴィ

レ、また、他の多くの宗教改革者も、女性が説教をし、教えることを厳しく禁じた。<sup>10)</sup>

カトリック教徒は一致して、プロテスタント女性信者の聖書と神学への好奇心を非難した。ロンサルは『フランス民衆への忠告』において、一般的な意見を次のように述べている。「家事をし、家を守らなければならない女性が空しく福音書の積み明かしをする時、私は残念な気持ちでいっぱいである。」<sup>11)</sup>

モンテーニュによれば、「女性は神学に関わるのは全く適していない。」<sup>12)</sup> しかし、ロンサルにしても、モンテーニュにしても、女性の増大する宗教的好奇心をせき止めることができなかった。17世紀には、カトリックでさえ神学や論争に関わる問題を扱うことを躊躇しなくなるのである。

### 結婚と訓育

パウロの教説の名のもとに企てられた結婚の復権は、福音主義者や宗教改革者によって、エミール・V. テルが考えているように、ただ単に積極的だけでなく、女性の身分と観念に関して、重大な結果をもたらした。我々が関わっている領域では、とくに、そのことが感じられる。<sup>13)</sup>

2人のユマニストが私達の注意を引く。<sup>14)</sup> エラスムス<sup>15)</sup>とスペインのユマニスト、ホアン・ルイス・ヒーヴェス<sup>16)</sup>である。エラスムスは福音主義の結婚観を最も完全に、そして、最もよく整理して、『キリスト教的結婚教育』<sup>17)</sup>を著し、ヒーヴェスは、『キリスト教的女性教育』<sup>18)</sup>を書いた。エラスムスとヒーヴェスは教育的な目的を追求した。

6) Natalie Zemon DAVIS, *Cultures du peuple*, p. 130.

7) Marie Dentièrre, *Epistre tres utile faicte, dans la Corr. des réformateurs*, Genève-Paris, t. V, 1878, pp. 295-304.

8) J. Jean de JUSSIE, *Le Levain du calvinisme, cité Les Réformes*, p. 242.

9) GARRISSON-ESTERE (J), *L'Homme protestant*, Hachette, 1980, p. 153.

10) Cf. BIELER (A), *L'Homme et la femme dans la morale calviniste*, Genève, 1963, pp. 77-78.

11) RONSARD, *Discours des misères de ce temps*, Genève, 1979, p. 133.

12) MONTAIGNE, *Essais*, I, XXV, p. 140. Ed. de VILLEY.

13) Emile V. TELLE, Cf. *Mariage d'Anglème*, p. 316 et passim.

14) Cf. MARGOLIN (J.-Cl.), *Histoire mondiale de l'éducation*, PUF, 1981, t. II, pp. 181-186.

15) LA GARANDERIE, M. M. de), "Le féminisme de Thomas More et d'Erasmus" *Moreana*, n° 10.

16) KAUFMAN (G.), "Vives on the education of women" *Signs*, t. 3, n° 4, (1978), pp. 891-896. Juan Luis VIVES (1492-1540) スペイン、ルネッサンス期の人文主義者、エラスムスの友人。

17) *Institutio christiani matrimonii* (1525)

18) *Institutio foeminae christianae* (1524)